

もうそろそろ、冬も終わりに近づいている。

風がなんとなく温かみをおびて、肌を刺すような感触が少し和らいで、丸まっていた背中が自然と伸びているように思われた。

やまべぜんえもん

山辺善右衛門は、川沿いの小道を急いでいた。

用をすませて、今日は早く帰って、自分の家の祝い事に参加しなくてはならないのである。

おまかないぎんみ

善右衛門は、御賄吟味という役で藩に出仕している。むろん武士なので、もとより背中をまるめて歩いているわけではない。

川沿いの道から海岸沿いの道に出た。供は連れていない、今日は一人だ。

大浦の庄屋の家を訪ねるのである。

大浦の庄屋は大崎といい、網本も兼ねている。役目から繋がりは強く、そんなに頻繁ではないが、まま訪れることがあった。

おとな

善右衛門は、一軒の家の前に立つと、開いている門から、特に訪いもいれずにそのまま中に入った。

門は馬小屋つきの長屋門で、なかなか立派なものである。中に入ると、広々とした庭先で、数人の男達が農具の手入れなどをしているのが目に入った。

その中に混じっていた、一人の女衆が善右衛門をめざとく見つけ、頬かむりを取って腰をかがめて近寄ってきた。

女は四十がらみで、庄屋の女房でおみねのようだった。

おみねは善右衛門に近づくと

「まあ、まあ、山辺様、お久しゅうございました。ようこそいらつしやいました」

と、愛想よく笑った。

「おみね、ひさしぶりじゃ、息災でおったか」

これも、また嬉しそうに顔をほころばせた。

おみねは善右衛門よりもひとまわりほど年上で、子供の頃から知っていることもあって、善右衛門はおみねを実の姉のように慕っていた。

「お知らせくだされば、お迎えにあがりましたものを」

「いや、今日は少し急ぎの用で、そうゆつくりも出来んのじや」

おみねは、はて、というように善右衛門を見つめた。

「いや、用はそれほど火急ではないのだが、そのあとにちと別の用があつてな」

「それは…」

おみねにとつても善右衛門は、なれ親しんだ相手である。遠慮がない。

「いや、実は、去年、跡取りが生まれたのだが、その祝いを親戚一同でやろうということになつてな」

「まあ、そうでございましたの、それはおめでとうございました」

「うむ」

善右衛門は照れ臭そうに頷いた。

善右衛門が、奥座敷に通された後、庄屋の昌左衛門しやうざえもんが現れた。昌左衛門は四十を二、三過ぎたあたりで、細身だがしつかりとした体つきをしている、色は浅黒い。

昌左衛門は下座に座ると

「山辺様、お久しゅうございます、ご機嫌麗しくなによりでございます」

と、丁寧な挨拶をした。

「こちらこそ、無沙汰をしておりました」

善右衛門が鷹揚おうように応えた。

「酒がよろしゅうございますかな、それとも茶が」

昌左衛門がたずねると

「あ、いや、今日はちと急ぎがあつてな」

「そのようでございますな、先程おみねから伺いました。御嫡男ちやくなんが事、おめでとうございます」

「うむ」

昌左衛門が手を叩くと、女中が現れて、昌左衛門が耳打ちするとすぐに茶が運ばれてきた。

昌左衛門と善右衛門は、運ばれてきた茶をすすりながら

「それにしても、随分お久しぶりでございますな。一年、いや、もつとですかな？」

「一年半になるかな、殿の江戸のおなりがあつたのでな」

「そのように伺うかがつてはありました」

善右衛門は、参勤交代の供侍として江戸に行っていて、最近帰ってきたばかりだったのだ。

「お江戸の様子はいかがでしたか？」

「いや、それが、お江戸というのは、まあ何とも賑やかなところで、毎日が祭の縁日のような。拙者も初めてのお江戸行きなので、珍しいやら、驚くやらで」

「ほう、それは」

善右衛門は、少し興奮気味に話し始めた。

それを、昌左衛門は興味深そうに聞き入っている。

むろん、昌左衛門とて江戸に行ったことはない。ただし、昌左衛門は、先代である善右衛門の父親とか、出入りの役人から多少は聞き知っていたが、それでも新たな話は面白いものである。

善右衛門の話はしばらくつづいたが、話が途切れたところで、善右衛門はたと膝を叩いた。

「そうであつた、話に夢中になつてしまい、肝心な話をわすれるところであつた」

昌左衛門は、そんな善右衛門をにこにこ笑って見ている。

善右衛門は、一旦、入口の障子の上の鴨居かもいに目をやった後、振り向いて居住いずまいを正すと、咳ばらいをひとつした。

「外でもないのだが」

「なんでございますな？」

「実は、先だって、大谷一馬が死んだ」

「存じております。山辺様が帰ってこられる少し前でした」

「拙者も帰ってくるなりそれを耳にした」

昌左衛門がうなずくと、善右衛門は話を続けた。

「それが、大谷には子がいなかった。養子ももらっていないか
つたのじゃ」

「そうでございましたか」

うなずいてはいるものの、昌左衛門にはあまり興味はなさ
そうだった。

善右衛門は、そんな昌左衛門の様子を見て、躊躇したが、
思い切って言った。

「それで、御台所方が一人足りなくなつた」
おだいどころかた

昌左衛門は少し眉をひそめた。

「それは、お困りでしょう」

「そこで、どうじやろう、市次郎をその代わりに出仕させて
貰えまいか」
いちじろう

善右衛門は、大崎家の次男の名前を口にした。

「つまり、市次郎を養子にさせよとおっしゃるのですな」

昌左衛門は困った顔をした。

「その方は、大谷の縁戚でもある」

善右衛門は言った。

「しかし、市次郎に務まりましようか？市次郎の身の振り方を考えております折に、有り難いはなしではございますが」

「大丈夫であろう、御台所方は薄給じやが、昌左衛門も知つての通り役得が大きい」

「存じております」

「ふちまい きりまい扶持米、切米併せて二十五石ぐらいかのう」

「二十五石でございますか」

昌左衛門は反芻するはんすうように答えた。

「正三郎ではいけませんので？」

昌左衛門は、三男の名前を口に出した。

理由は分らないが、昌左衛門はしぶっている。

それには善右衛門が難色を示した。

「正三郎では、ちと、料理の腕がな」

二人はそれっきり黙ってしまい、しばらく沈黙が続いた。
昌左衛門は、その間、時折、善右衛門の様子をうかがっていたが、困り果てた顔で腕組みをしている善右衛門を見ると、もはや断ることなどできないと悟ったのだった。

「承知いたしました。そのようにお取り計らいください」

善右衛門は、はつとして、昌左衛門を見つめ、相好を崩した。
そうこう

昌左衛門夫婦は、昔から善右衛門の笑顔に弱かった。

「かないませんな、若には」

「そうか、すまぬな」

助市は、すけいち下城の途中、大廻りをして海岸端を歩いて帰るのを日課にしていた。そうしないと、御殿門から近くにある自分の家にすぐに帰りついてしまうからだ。

家には、隠居した父の善兵衛ぜんべえがいて、することがないのか、助市が帰って来ると、今日は御殿でどうだったとか、最近誰それはどうだとか、なにかとうるさく話しかけてくるので、できるだけ早く帰りたくない、というのが本音だった。

そんな塩梅で、助市は海岸沿いの道をぶらぶらと歩いていた。つまり、足取りは遅く、傍はたから見たら怪しまれそうな道みち行ゆきである。

十間ばかり向こうに、二人の男が立っているのが見えた。一人は肩衣かたぎぬをつけた侍だが、もう一人は袴こそ着けているが、肩衣はつけていない。

助市のつけている粗末な肩衣とは違い、それなりに立派な物で、あきらかに助市よりは身分が高い。助市の肩衣にしても、仕事場でつけているよれよれのものではなく、登城、下城時につけている、少しはましなものなのだが。

助市は、立ち止まっている二人の侍の前を、頭を下げて通り抜けようとした。

が、すぐ横を通り過ぎようとしたとき、

「大谷ではないか」

と、肩衣を着た侍が助市に声をかけた。

声をかけられて、助市は振り返って侍を見た。

肩衣を着た侍は、長身でがっちりとしていて、堂々たる体躯だ。

助市は、まぶしそうに侍を見上げた。

「あ、これは桜田様」

肩衣の侍は、足輕物頭の桜田源右衛門さくらだげんえもんだった。もう一人は家士の木戸以蔵である。

桜田は、にやにやして助市を見ている。

「どうした、大谷、えらく元気がないではないか。儂わしに気づかん程、なにか悩み事でもあるのではないか？」

「いえ、そのようなことは」

助市はおずおずと答えた。

「まあよい、ところで、おぬしも家督を譲り受けて三年になるであろう。大内のよりどのとの婚礼はいつなのじゃ、あまり待たすと失礼ではないのか」

大内のよりとは、助市の許嫁いいなずけである。

大内家は馬廻り役百二十石の家柄だが、よりは三女で、当主の与三郎が助市の父源兵衛と懇意だったこともあり、その約束をしていた。

助市は困った。

実際、婚礼の約束をしているものの、最近、よりの父親の

与三郎からはなんの音沙汰もない。婚礼に消極的で、しぶつ
ている感がありありと伺われた。

それについては、今、目の前にいる桜田源右衛門の横やり
が入っている、という噂が助市の耳にも入って来ていた。

助市の困った様子を見て、

「なに、儂もそのことは、心配しておるでな、なに、儂の親
心だと思って聞き流してくれ」

と言つて、鷹揚に、木戸以蔵を連れ、立ち去った。

親心もなにも、そもそも桜田源右衛門は、助市より一歳年
下なのである。

助市が家に帰り着いたのは、七つ半（午後五時）になろう
としている頃だった。

帰るなり、いつもどおり善兵衛が声をかけて来た。

「今日はどうであつたな、なにも変わりはないか」

「べつにございません」

助市は淡々と答えた。

「なにもない、か」

善兵衛はつまらなそうな顔をした。

「まあよい、なにか困ったことがあったら、儂に相談するのじゃぞ」

まるで、子供扱いの善兵衛の態度に顔をしかめながら、助市は奥に引っ込んだ。

八月のことで、まだ外は日が差している。

薄黄色に暮れ始めた気配のなかで、つくつく法師が鳴いている。残暑はまだまだである。

よりは、女中のみつを連れて、中ノ丁辺りを東に向って歩いていった。

墓参りの為である。

とは言っても、特別な日でもなければ、誰かの命日という訳でもない。ただ、月に一度、先祖の墓参りの為に、墓所の

みょうでんじ
ある妙典寺に出かけるのである。

武家の子女が、自由気ままに出掛けることのできない時代である。

よりは、気性がやや強く、男勝りなところがあつて、本来ならば、あつちこつち出歩いて楽しみたいという気持ちを持

ていた。もし、許されるなら、剣術なんかも習ってみたいと思っていた。

要は、墓参りは口実なのだ。

「ねえ、みつ」

よりがみつに声を掛けた。

「なんでしよう？」

「今日は帰りに、門前のお店で、お団子でも食べてかえりましょうか」

「ほんとうですか」

みつは顔一杯に笑顔をつくった。

みつはまだ十四である、いたってあどけない。

よりは、それを見て笑った。

「本当ですよ、私はうそなど言いません。みつにそんなに嬉しそうな顔をされて、うらぎりでもしようものなら、一生たた崇られます」

「私は、崇ったりなどいたしません」

みつが真顔でこたえた。

「冗談ですよ」

二人は他愛もない会話をしながら、みょうでんじ妙典寺までの道中を
ゆつくりと歩いた。

途中、通行人やら物売り達とすれ違いながら、さほど遠く
ない道のりを楽しんでいた。

武家地なので、それほど人通りは多くない。武家地を抜け、
じんでんがわ神田川に掛かる橋を渡ると、その道沿いにある寺や神社の参
道に入る。

目指す妙典寺のほかに、三つばかりの寺があり、妙典寺の
あたりはみょうでんじまえ妙典寺前と呼ばれ、藩士の墓所である妙典寺の前
には、茶屋や物売りの店があつた。

よりは、もうすぐ十九になろうとしていた。

助市との縁談が遅々として進まないうちに歳をとってし
まった、という格好である。

よりは、灰色の生地ききようがらに桔梗柄の小袖、といった地味な出で
立ちで。

女性としては、五尺三寸と背が高く、すらつとした体つき
で、色は浅黒かったが、端正な顔立ちをしていた。

よりは、助市との縁談が進まない事に、苛立ちを感じてい

た。それに、桜田源右衛門が、用もないのに頻繁ひんばんによりの屋敷を訪ねてきて、うるさく声を掛けてくるのにうんざりしていた。

用もないのとは、あきらかによりにはそう思えるのである。源右衛門は、よりの父与三郎の碁仲間と称して、下手くそな碁を打ちに来るのである。

下手くそとは、源右衛門の顔を見ると、どうしてもそう思えてしまうのである。

よりの墓参は、そんな折の気晴らしでもあった。

このころ、宇和島藩八代藩主伊達宗城だてむねなりは、西洋式砲術を取り入れ、各所に弾薬製造所を作り、きたるべき時に備えようとしていた。

妙典寺近くにもそれはあった。荷駄の出入りは、神田川沿しんでんがわいの道を通じておこなわれた。

大谷助市は、御台所方おだいどころかたという役目で、藩主の朝夕の食事を作るのが主な仕事である。

祖父の市次郎からかぞえて三代目である。市次郎は評判の

料理上手で、先代の藩主にもおぼえが目出たかった。

おだいどころかた
御台所方は地味な役目である。しかし、地味といってよいのかどうか、やや戸惑うところである。

というのは、他の役職では、ほとんどいくら努力しても藩主であるお上かみの目に留まることはないが、御台所役人は、直接お上かみが召し上がるものを作るだけに、お上の意識もいささか違ったものがあつたのである。

ところで、市次郎の評判はよかったが、その息子の善兵衛はさほどでもなく、達者なのは口だけだ、という陰口を叩かれていた。しかし、人づきあいは上手で、人間なにか取り柄があるものである。

善兵衛は、そんな評判を知つてか知らいでか、それでも自分なりに思うところがあつたようで、武士の本分と言って、御台所役人には不似合いな剣術に、熱心に精を出すようになったのである。

その後、助市が跡を継いだが、これは祖父の市次郎ゆずりの料理上手で、すこぶる評判が良い。

最近では、城中で売っている弁当にしても、順番待ちの予

約が入るほどになっていた。

さて、この弁当なのだが、これは、御台所役人が調理に使った余りもので作られたもので、それを城中で販売できるといった、彼らの役得のひとつであり、おおむねどの藩でも認められたものである。まあ、黙認というはなしなのである。その日は、なんとなく気が進まないこともあつて、助市はいつものように道草はせずに、まっすぐ家へ帰った。

家に帰ると、他家に嫁に行った妹のさきがやつて来ていて、台所で母のゆき江と話していた。

どうせまた、嫁ぎ先の愚痴でも言いに来ているのだろうと思っていると。玄関先で、足を洗っている助市のところへ顔を出した。

「兄上、お帰りなさいませ。今日は早いんですね」

「なんだ、来てたのか、べつに早くはない、いつも通りだ」

助市は、そっけなく言った。

「あら、兄上は、いつも寄り道をしていると、評判ですよ」

助市は、にがむし苦虫を噛み潰したような顔をした。

そんなことまで、噂になっているのかと、面白くなかった。

「なんだ、僚太郎に聞いたのか」
りようたろう

僚太郎とは、さきの夫だ。

さきは、笑っただけで、否定はしなかった。

とりがいりようたろう

さきの夫、鳥飼僚太郎は同じ御台所方の同僚で、歳は助市より二つ上になる。

さきの嫁入りについては、目はしの効く善兵衛が、早いうちから鳥飼家へ申し込んで、決めていたはなしである。

なにしろ、御台所方は食いつぱぐれがない。そういう善兵衛の親心である。

「兄上」

「なんだ？」

「より様との婚礼は、いつになるのでございますか？」

助市は、足を洗う手を止めて、さきを見た。

「さあな、先方の都合もあるでな」

「さきほども父上にお聞きしましたら、そうじやのうとおっしゃったきりでした」

助市は、ふむと首を捻った。

これも、善兵衛が、剣術道場の朋輩であるよりの父与三郎

に、うまく取り入って決めた話である。

話としてはそうなのだが、これは、よりが助市をたいそう気に入っていて、まさに良縁と言えたのである。

よりは、身長こそよりとどっこいだが、色白で細身で穏やかな性格の助市が好きだった。

「いつまでも、こんなところで油を売っていてよいのか、僚太郎も帰っておるであらう」

助市は、立ち上がってさきに言った。

「よいのです、それに、もうすぐ帰りますから」

さきは、平然と答えた。

嫁ぎ先の鳥飼家は、さきにとって居心地が良いようである。

さきは、助市が家に上がりこむと、入れ替わるようにして帰って行った。

善兵衛は、しばらく腕組みをして考え込んでいた。

助市の縁談についてである。

助市が、自分の跡をとって三年が経とうとしていた。

その話は、もうとうに終わっていても良いはずであった。

つまり、婚礼が滞りなく終わっていて、なんら不思議はなか

った。

（今度、与三郎を訪ねてみるか…）

善兵衛はつぶやいた。

それと重なるように、助市の足音が、縁側の障子の外を通
つて奥へ消えていった。

それから二三日して、善兵衛は大内家を訪ねた。

大内家を訪ねるのは久し振りである。

最近、助市とよりの縁談のことで、少し気まずくなつて
いたので、自然と足が遠のいていた。

大内家の当主与三郎は、今は善兵衛と同じく隠居の身だが、
依然、自家においては、何事にも決定権を持っていた。

というのは、まず、まだ隠居して間がないこと、次に長女
のしのぶに婿を迎えたということ、皆が気を使って顔色を
を伺う、うかがというあんばいなのである。

与三郎は、善兵衛の顔を見ると、一瞬困ったような気色けしきを
見せたが、すぐに笑顔で迎えた。

そこは、若い頃からの剣友である。

「どうした、善兵衛、随分久しぶりだな」

当然、与三郎には善兵衛の来訪の目的はわかっている。

「大内殿、お久しぶりです」

善兵衛は、やや、かしこまって挨拶をした。

善兵衛と与三郎は同い年である。若い頃は、妙に馬が合つて、お互いを名前で呼び合っていた。

しかし、お互い家を継ぐと、そうもいかなかった。大内家は、百二十石で知行取りである。二十五石の善兵衛とは、家禄も家格も違っていた。

「最近、助市はどうだ、うまく勤めているのか、城中での評判はまずまずのようだな」

与三郎は、屈託なく言った。

取りつくろっても仕方がない、といった表情である。

「私と違って、料理の才はあるようだな」

善兵衛は答えた。

うん、と言ったあと、与三郎は暫くだまり込んだ。

「最近、というか、二、三年前からなのだが…」

与三郎が、口を開いた。

「桜田源右衛門が、家を訪ねて来るようになった」

「最初は、碁を習いたかったので、教えてくれという話で、熱心に通つて来ていたのだが」

与三郎は、うむ、と眉をひそめて首を捻った。

「その源右衛門が、ある時、よりを嫁にくれと言いだしたので、儂は、よりには助市という許嫁がおると言つて断つたのだが、それでも、やつは諦めようとせん」

善兵衛は溜め息をついた。

そのことは噂で聞いて知っていたが、それでも、いざ実際に聞くとやるせない気持ちになった。

「つまり、助市との縁談は、無かつたことにしたいと言われるので？」

「いや、とんでもない」

与三郎は、あわてて手を左右に振った。

「そうは言つてはおらん。ただもう少し時が欲しいのだ」

九月の昼下がりで、程よい陽射しが障子を照らしていたが、二人は暫く黙ったままだった。

「先代の桜田源右衛門を、憶えておいでか」

善兵衛が口を開いた。

「むろん、憶えているとも」

与三郎が答えた。

「遺恨のある相手でしたな」

先代の桜田源右衛門とは、いま現在の源右衛門の父で、三年前に家督を息子に譲って隠居したもので、しゅうがく隠居後は秋岳と名乗ったが、一年前に亡くなっていた。

善兵衛と与三郎は、まだ十代の頃、共に、柳生流の流れをくむ城下にあるおのがみ尾上道場に通って、剣術の修業をしていた。
尾上道場は、藩士の子弟である尾上某が、江戸の柳生流道場やぎゅうりゅうで修業し、その後、諸国を武者修行して腕を磨き、宇和島へ帰って開いた道場である。

尾上おのがみいつとつりゆう一刀流と称し、自らいつとつさい一刀齋と名乗ったのである。

一刀齋は、この時代に諸国武者修行などというものをしただけに、その性格は豪胆で、稽古は熾烈しれつをきわめ、善兵衛も与三郎も、いく度となく道場に倒れ伏して、血反吐ちへどを吐いたほどである。

そんなわけで、必然的に入門者はすぐに辞めてしまい、あ

まり評判はかんばしくなかった。

が、面白いもので、逆にそんな評判を聞きつけ、ぜひにという者も多く出てきて、道場は活気を呈するようになってきたのである。

しかし、そうになると、面白くないのが、以前からある他所よその道場である。

その中でも、とりわけ面白くないのが、その頃城下で隆盛をきわめていた金子道場である。

これは、江戸中期頃に、金子常佑が、これも江戸で直じき心影流しんかげりゅうを学び、開いた道場である。

金子道場は、門弟に家格の高い上士の子弟が多く居て、その後ろ盾としていたのが、桜田源右衛門をはじめとする桜田一族である。桜田の本家は、家老をも務める家柄である。

したがって、門弟には、それぞれなんらかの思惑があつて入門した者が多かった。

与三郎は、うん、と言った後に、

「先生は、何故、あの時、我々を連れて行ってはくださらなかったのか」

と、つぶやいた。

「自信がおりだつたのでしよう」

善兵衛が言った。

「儂らが駆け付けた時には、先生はすでに亡くなられておられた」

「すさまじい剣撃けんげきでした」

金子道場の主は、当時、金子瑞玄かねこずいげんであつた。

瑞玄は、中肉中背で引き締まった体つきをしていたが、歳はもう五十を越えていた。

ふだんの稽古は、師範格である先代の桜田源右衛門が、門弟達に指導していた。

この二つの道場は、次第に互いに反目し始め、それぞれの門弟達同士でいざこざが絶えない、といった状況になつてきたのである。

そこで、瑞玄はこれを脱却しようと、尾上一刀齋に、試合を申し込んだのである。

いずれにしろ、この状況が、お互いなんの利にもならないことは誰の目にも明らかであつた。

しかし、これが一刀斎ではなく、瑞玄の方からであったのは意外であつた。

瑞玄は、剣術家としては盛りを過ぎていた。一方、一刀斎は三十半ばで、体格もよく、脂が乗り切っていた。

「あれでは、ひとたまりもないだろう」

与三郎は無然としていた。

その時、駆け付けた二人は、地面に倒れ伏している一刀斎を抱き起した。

抱き起してみると、一刀斎の左肩から胸の中央辺りまで切り割られていて、おびただしい血が流れていた。

おそらく、即死であつたろう。

二人は、一刀斎の亡骸いっとうさいを道場まで運んだ。

やがて、目付がやって来て、一刀斎の亡骸あらたを検めて帰つた。

目付は、特に何も言うことなく、引き上げて行つた。

目付が帰つた後、集まっていた門弟達は、一刀斎の亡骸を

洗つて、白装束しろしやうぞくを着せた。

そこで、一刀斎を洗っている時に、与三郎はその背中に刀

傷があることに気づいたのだった。

後で知ったのだが、その時、試合の立会たちあいをする筈であった
桜田源右衛門が、遅れてやって来たというのである。

一刀斎の門弟達は、その刀傷を疑った。

「あれは、なんだったのでしょうか」

善兵衛が、思い出したように言った。

「最初、金子は、代々伝わる秘剣ひけん、稲妻落しいなずまおとしを使ったのだと
いうはなしでしたが……」

与三郎は、ふんと鼻で笑った。

「なにが稲妻落しだ。あれは桜田が、後ろから切りつけただ
けのはなしではないか」

「先生も、さぞ無念であつたろう」

与三郎の言葉に、善兵衛も与三郎も、思わず目頭を押さえ
た。

善兵衛は、帰りの道すがらに、これまで決して忘れること
のなかった事を思い出していた。

一刀斎の死によって、自分の剣術修行も終わったと思った
時に、与三郎は、自宅の敷地に十坪程の道場を願って建てて

もらい、とりつかれたように自身の剣術修行に没頭したのである。

しかし、善兵衛には、当然そんな余裕はなく、せいぜい庭で木刀を振るぐらいしか出来なかったが、それでも何かを忘れるように木刀を振った。

そんな時代の事が、あれこれと頭に浮かんできた。

与三郎の方が、自分よりも心の傷は大きかった筈。

善兵衛は思ったが。

今、助市の縁談話に躊躇ちゅうちよしている与三郎を見るにつけ、もうそれは忘れ去られた過去のことだと、さびしい気がした。

しかし、何事にも目端めはしの効く善兵衛だけに、二百五十石の跡取りとの縁談に、心を動かされている与三郎の気持ちも、わからないわけではなかった。

（助市には、良い嫁を捜してやらねばならんな）

善兵衛は思った。

風が少し冷たくなりはじめた、十月の始め。

助市は、みょうでんじ妙典寺を目指して道を急いでいた。

昨日、よりからの文で、お会いしたいのでおいで下さいと
のことだった。ふみ

最近は、よりに会っていない。しかし、よりからの呼び出しはめずらしいことではないので、特に何かを思うことはなかった。

助市は、妙典寺に向かう急な坂を上って行った。

山門にたどり着くと、辺りを見回したが、よりはまだ来ていないようだった。

「さて」と、助市は呟いた。

助市は、近くに置いてある手桶ておけに水を汲むと、本堂のすぐ横にある、祖父市次郎いちじろうの墓を、持ってきた手拭いで洗いはじめた。

市次郎は、五年前に亡くなっていた。享年六十二であった。助市が、墓を洗っていると、すぐ後ろに人の気配がして振り向いた。

そこには、よりが女中のみつを連れて立っていた。

「遅くなって、申し訳ございません」

よりは言った。

が、それほど申し訳なさそうな顔には見えない。

「いや、私も今来たばかりですから」

助市が、立ち上がろうとすると、

「あ、お続けになってください。わたくしはその辺りで待っておりますから」

よりは、助市を手伝おうかと思ったが、まだ嫁でもない自分が、そうすることは、差し出がましいと思ったのである。

助市は、ひととおり墓掃除をすますと、よりの所へ戻ってきた。

よりは、山門の前に立っていて、城下の方を眺めていた。

妙典寺の山門からは、城下が一望できた。

女中のみつは、何処かへ行つて、居ない。

「お待ちせしました」

助市は声をかけた。

よりは、振り返り、助市を見て笑った。

笑うと、端正な顔がどこか愛嬌のあるものに変わった。よりの魅力は、そんなところにもあるのだろう。

よりと助市は、山門の石段に腰を下ろして、しばらくは何

も言わずに城下の方を見ていた。

助市にしても、よりと会うのは久し振りである。しかしながら、なにを話してよいのやら、少し戸惑っていた。

助市は、山門の下急な坂を見ながらよりに言った。

「昔、私は、この坂が怖かったのです」

「坂、ですか？」

よりは、振り向いて助市の横顔を見た。

「この坂の上に立つと、転げそうで…」

「結局、降りることができないので、誰かに手を引いてもらったのです」

助市は、眩しそうに目を細めた。

それが、よりにはおかしくて、思わず、小さくはあつたが、声を出して笑ってしまった。

「おかしいですか」

助市はよりを見た。

よりはまだ笑っていた。

よりの笑いに嫌味があるわけではなかったが、助市は、ちよつとむつとした。

よりは、ひとしきり笑った後、真面目まじめくさ腐った顔で言った。

「男の方は、そのようですね。私達女子おなごは、そうでもないのですが、男の方は、案外高いところが苦手なようですわ」

「そうなのですか？」

「父もそうですし、義兄あにもそのようです」

「私だけかと思っていました」

よりは、また少し微笑んだ。

そのあとに、

「わたくしと、助市様の婚礼はいつになるのでしょうか」

よりは、ぽつんと言った。

助市は、先日、父善兵衛から言われていた。

つまり、よりとの結婚についてである。よりとの結婚は難しくなったと、善兵衛は助市に告げたのである。

よりは、そのことは知らない様子だった。

「本当に、私でよいのでしょうか」

助市は言った。

よりは、驚いて助市を見た。

「よりさんには、私なんかよりもっと相応ふさわしい人が居るので

はないでしょうか」

助市の言葉は、淡々としていて、よりの胸をえぐった。
なにかあつたのだ。

よりは思つた。

「桜田様のことですか」

よりは、躊躇ためらわず言つた。

「それは判りません。ただ、父からそのようなことを言われました」

「わたくしは、あの方は嫌いです」

今度は、助市が、驚いてよりを見た。よりがそんなことを
言い出すとは、思つてもみなかつたことである。

「助市様は、わたくしに、わたくしの嫌いな方の所へ嫁に行
けとおっしゃるのですか」

よりは言つた。

助市は、言葉に詰まつた。

よりは、今にも泣きそうだった。

「いえ、はっきりとそう言われた訳ではないのです」

助市は、よりから目をそらそうとしたが、出来なかつた。

「わたくしが、父上に聞いてみます」

よりは、氣丈さを取り戻して言った。

助市は、そんなよりを、黙って見つめていることしかできなかった。

よりの気持ちだが、それほど強いものだど、今まで考えたこともなかったのだった。

その日、桜田源右衛門は、城中で呼び止められた。

呼び止めたのは、中老の稲葉外記である。いなばげき

稲葉は、呼び止めたあと、三の丸御殿にある一室に源右衛門を連れて行った。

向かい合って、稲葉は、

「どうじゃ、その方、御城おしろの勤めには大分慣れたか」

と言った。

「お陰さまで、無事つとめております」

源右衛門は答えたが、この稲葉外記は、子供の頃から知っていることもあって、源右衛門の言葉はどこか馴れなれしい。

「先代が亡くなって、はや一年、一年はあつというまじや」

源右衛門は、わざわざそんなことを言う為に、呼び止めたのか、と思った。

「先代には、随分と世話になった」

稲葉は、思いを馳^はせるような表情で、しんみりと言った。

源右衛門は、軽い笑いを浮べた。

「その方のことで、近頃、みような噂を耳にした」

「なんでございましょう」

源右衛門は言った。

「その方が、藩士の許嫁である女子^{おなご}に、ちよつかいをだしているといった話じゃ」

源右衛門は、あつと思った。

稲葉は、その源右衛門の表情を見て取ると、

「まことか」

と、訊^きいた。

源右衛門はうつむいた。

「そんな話は、よろしくない」

源右衛門は答えない。

さらに、稲葉は言った。

「大谷助市は、最近、城中でも評判が良い、奴の弁当は藩のお歴々にも人気がある。御家老なども、好んでおられるようじゃ」

そんなことまで知っているのかと、源右衛門は思った。

「よからぬ噂がたつと、決して得にはならぬし、ひいては桜田の名に泥を塗ることもなる」

「お言葉を返すようでございますが」

源右衛門は言った。

「たかだか、台所番ではありませんか」

源右衛門の言葉に、稲葉の顔色が変わった。

そして、間髪を入れずに稲葉は言った。

「桜田、言葉をつつしめ、お上の御台所である」

稲葉の言葉は、大きくはなかったが、強い語調で源右衛門

を叱責した。

「申し訳ございません」

源右衛門は、はっと中老の顔を見ると、あわてて畳に平伏した。

源右衛門が部屋を出て行ったあと、中老の稲葉は、おおき

く溜め息をついた。

先代の源右衛門とは、懇意にしていたが、その倅には手を焼いていた。その、粗雑な性格には馴染めそうもなかった。しかし、桜田一族との絆は良好に保っておきたかったのである。

稲葉は、立ち上がると、襖を軽く開け、辺りの様子をうかがった後、足早に部屋を出て行った。

源右衛門は、帰り道、よりの家である大内家に立ち寄った。しかし、生憎あいにく隠居の与三郎は留守で、帰ろうとすると、外から帰って来たよりと、ばったりと出会ってしまった。

「これは、よりどの、どちらへお出かけですか」

源右衛門は、精一杯の愛想笑いで迎えた。

どちらへ出かけようと、よりにとっては大きなお世話なのだが、そのままそれを言う訳にもいかない。

「あ、桜田様、おいででございましたか」

「いや、お父上に碁の相手をしていただこうと、参ったのだが、あいにくと留守であつた」

さようでございますかと、よりが横を通り抜けようとする
と、

「それほど、素っ気なくすることもあるまい」

と、源右衛門が言った。

よりは、足を止めて振り向いた。

「お父上から聞いたであろう、拙者との縁組えんぐみのこと」

源右衛門の不作法な言葉に、よりの表情が険しくなった。
もともと気の強い性格のよりである、気持ちを抑えようと
しても、そう簡単にはいかない、ついつい顔に出てしまう。

「そんなお話は、伺っておりません」

よりは源右衛門に言った。

「そうかのう、お父上は乗り気なのだがな」

どうやら、源右衛門はこの話に、一気に片をつけようとする
と、
つて来たらしい。

しかし、肝心の与三郎は留守だった。と、ということのよう
だ。

「わたくしには、大谷助市様という許嫁がおられます」
よりは言った。

「知っておる。だが、お父上は、そうは思っておられんようじゃ」

源右衛門は、自信たつぷりに言った。

そう言われては、よりに言い返す言葉はなかった。

よりの様子を見て、源右衛門は、やや気持ちに余裕が生まれたようで、

「存じておると思うが、わが桜田家は秀宗公がこの地に入府されて以来の家臣じゃ、わが家^{いえ}に嫁げば、なにひとつ不足はないと思うがな」

と、諭^{さと}すように言った。

よりは、より自身にとつてなにが不足なのか、わかりもしない相手に、そう言われたのを腹立たしく思った。

よりは、これ以上源右衛門の相手をしていても仕方がないと思った。

よりは、わたくし、これから、少し急ぎの用がありますのでと、立ち去ろうとした。

が、「失礼ではないのかな、拙者の話はまだ終わってはおりん」と、呼び止めた。

源右衛門は、よりの冷たい態度に苛立ちを感じていた。それは、とりもなおさず、助市に対する嫉妬から来るものである。

「わからんまかないのう、賄まかないの余り物をちよろまかしてくるような、
ふじようやくにん不浄役人のどこがよいのじゃ」

源右衛門は言った。

それを聞いて、とうとうよりの堪忍袋の緒が切れた。

「聞き捨てならんことをおっしゃいますな。御台所方が、余り物を頂戴なさるのは、それこそ、秀宗公からの習わし。それに、なにより、お上のお召し上がるものを御作りする者を、不浄役人呼ばわりなさることは、とりもなおさず、お上を不浄呼ばわりしておられることではないのですか、不浄役人が作ったものを、お上がお召し上がりになる、と桜田様はおっしゃるのですか。そんなことを、お上がお聞きになりましたら、ただではすまないのではないのですか」

よりは、一氣にまくしたてた。

源右衛門の顔色が、真っ青になった。

「いや、拙者は、そんなことは言っではおらん」

源右衛門は、口ごもった。

そう言った後、桜田源右衛門は、這う這うの体で帰って行った。

その日は、源右衛門にとって散々な一日であった。

宇和島藩のある板島は、押し並べて温暖な気候である。

夏は暑く、しかし、冬は裏日本から入り込んでくる、冷たい風によって寒く、雪がよく降った。

西側には湾があり、湾の入り口には、自然の防波堤ともいえる九島があつた。

その外海には、宇和海が広がり、リアス式海岸を形成していて、豊かな漁場があつた。

そういった条件により、この地は人々が生活するのに適しているといえた。

海から見える城、鶴島城は、全体のバランスを考え造られていて、多方向から観て美しく造られていた。

その反面、おおよそ、要塞としての機能に乏しく、矢狭間も鉄砲狭間もなく、瀟洒な天守などは、籠城なんかとんで

もないといった塩梅で、城下にいたっては、大きく真っ直ぐな道路が、碁盤の目よろしく走っていて、戦時下を想定したものととても思えない作りであつた。

助市は、一日の勤めを終え、遠回りして、いつも通りの帰り道を歩いていた。

近頃は、父の善兵衛が、うるさく言うこともなくなつたので、さつさと帰つてもよさそうなものだが、染みついた習慣というものは、なかなか抜けないものらしかった。

いつも通りの海岸沿いの道で、六、七人の侍の姿が見えた。近づいて行くうちに、一人は桜田源右衛門であるのがわかつた。他は、おそらく、源右衛門の通っている金子道場の者達と思われた。

源右衛門は、助市をじつと見ているが、何も言わない。通り過ぎようとするど、

「おやおや、台所番が、いつも通り、有難いいただき物を大事そうに抱えておるわ」

と、そのうちの一人が言った。

助市は、調理の余りものを、そのまま、あるいは油紙に包んで、手製の麻袋に入れたものを、大仰おおぎようにさげていた。

助市は、別に、台所番と揶揄やゆされても、とくべつ何とも思わなかった。というのは、父の善兵衛自体が、家では、自分のことをそう言っていたからだ。

他の一人が、助市の行く手をさえぎった。助市の知らない男だった。

助市は、一瞬立ち止まった。

男は、無表情で、助市の前に立ち塞ふさがっている。

助市は、男のすぐ横をすり抜けようと、二三步足を踏み出した。

男は、道を開ける風で、少し体を後ろに引いたので、そのまま横を抜けようとした。が、助市はつまづいて、前につんのめって倒れてしまった。

麻袋は、放り出され、中身がそこらに飛び散った。

金子道場の者達が、どつと笑った。

「何をする」

助市は、思わず叫んだ。

男が、横を抜けようとした助市の足を蹴^けったのだった。

助市は、立ち上がって男達を見たが、にやにやしている他の者とは対照的に、源右衛門は、黙って助市を見ていた。いずれにしろ、多勢に無勢で、助市に勝ち目はない。

助市は、笑っている男達に背を向けると、飛び散った料理材料を拾いはじめた。

金子道場の者達は、その助市の姿を見て、再び笑った。

助市は、かまわずに、落ちているものを拾った。

「大谷」

助市の背後から、声をかける者がいる。

助市が振り返ると、桜田源右衛門が、助市を見下ろしていた。助市は、無言で源右衛門を見上げた。

源右衛門は、なにか言いたげで、暫く助市を見ていたが、やがて、その場にかがみこむと、

「大谷、儂と試合をしようではないか」
と言った。

「なんのことでしょう？」

助市は応えた。

「むろん、剣術の試合だ」

助市は、剣術などほとんどしたことがない。子供の頃に、父善兵衛に無理やり教えられたことはあったが、ものにはならなかった。

「私は、剣術など出来ませぬ」

「儂は知っておる。その方が、父親の手ほどきを受けたことをな」

「あれは…」と、言いかけて、助市は途中で口をつぐんだ。

助市のその様子を見て、源右衛門は言った。

「ならば、良い。その代り、よりどのは儂のものだ」

助市は、黙った。

源右衛門は、そんな助市の態度が気に入らなかった。

「それは、よりさんも承知なのですか」

助市が訊いた。

「むろんだ」

「儂が、おぬしに勝ったあかつきには、よりどのは、桜田の嫁になる」

そんな筈はない、と、助市は思った。

どっちにしろ、おおよそ助市には勝ち目のないはなしなのだ。よりが、そんな明らかな話を承知する筈はなかった。

しかし、よりの気持ちを思うと、このままおめおめと引き下がるわけにもいかない、と思った。

「わかりました」

助市は答えた。

源右衛門は、それを聞くと静かに笑った。

それから、立ち上がって、源右衛門は言った。

「試合は、十日後、場所は野川奥にある金子道場の野試合場のじあいじゃ。試合は木刀でおこなう」

そして、金子道場の者のうち、手招きで一人の男を呼んだ。

「試合の立会たちあいは、この、上田が務める」

上田と呼ばれた侍は、黙って頭を下げた。助市は、見たことのない人物だった。

桜田源右衛門は、金子道場で、師範代しはんだいをつとめるほどの腕前であり、助市がどころんでも勝てる相手ではなかった。

それでも、それを受けたのは、よりの気持ちを思ったのはもちろんだが、自分自身を、納得させるためでもあった。

助市は、家に帰ると、事の仔細しさいを善兵衛に告げた。

善兵衛は、腕組みをして考えていたが、暫くして、

「受けたものは、しかたがない」

「いずれにしろ、お前の腕では勝ち目はない。儂が、それまで稽古をつけてやることにしよう」

と言った。

翌日から、助市は、空いている時間は、庭で善兵衛との剣術の稽古に励むことになった。

助市にとって、木刀や竹刀を握ることなど、数年来なかったことである。

不慣れな剣術の稽古で、最初、あっちこっちが痛くて仕方がなかったが、不思議なもので、五、六日もすると、さほどでもなくなってきた。

ものにはならなかったが、子供の頃に、嫌々ながらもやっていたものが役に立った感があった。

とはいえ、素人に毛が生えた程度のもので、到底、ほめられたものではない。

善兵衛にしても、倅が、相手に勝つとは思っていなかった。

怪我をしなければよい、と思っていたのである。

十月も終わりに近づき、一気に晩秋の気配が迫ってきている。風が少し冷たかった。

助市は、川沿いの道を歩いていた。武家地の中を通り抜けるのは、なんとなく気が引けたのである。

特別、変った格好をしているわけではない。腰に大小を引つ提げ、木刀を入れた竹刀袋しないぶくろを持っているだけである。

向かっているのが、金子道場の野試合場なので、何一つ、不釣り合いなことはないのだが、それでも気になったのである。

助市の格好は、父善兵衛が、怪我をしてもつまらんからと、鎖帷子くさりかたびらを渡してくれ、それを着こんでいるものが、着物の襟元から覗いていて、さらに、薄い鉄板の入った、幅三寸の、大袈裟な鉢巻おおげさ はちまきを渡された。

しかし、それは、さすがに着けて道みちを歩くわけにもいかなないので、仕舞しまい込んであった。

試合場には、助市が早く着いた。

源右衛門は、まだ来ていない。

少し早かったかと、助市は思った。

助市は、その鉢巻を取り出し、額に巻いた。外れないように、きりりと締めた。

肩ひもを、丹念に結び、袖を吊り上げ、袴をはしよって止めた。

ややあつて、源右衛門がやって来た。だが、立会たちあいの上田はまだだった。

源右衛門は、現れると、助市をちらつと見た後、腰に差していた、大小の刀をすぐ横の地面に置いた。

源右衛門は、助市と同様に準備をととのえ、手に提さげて来た木刀を、ゆつくりと振り始めた。

源右衛門の振りは、助市のそれとは違い、力強いもので、助市は気が萎なえそうになった。

ひととおり素振りを終えると、源右衛門は、助市を振り返った。

「大谷、そろそろ始めようか」

源右衛門は言ったが、立会の上田はまだ来ていない。

「上田殿が、まだ来られておりません」

助市は、答えた。

「上田は、来ない」

源右衛門が言った。

助市は、驚いて源右衛門を見た。

「上田は、腹痛で来れなくなった」

「それでは、試合はできません」

助市は言った。

源右衛門は、ふんと、鼻で笑った。

「べつに、上田がいなくても、儂とおぬしがわかっておれば

良いのではないか」

そう言つて、源右衛門は助市を見た。

助市は、鎖帷子くさりかたびらを襟元から覗かせ、大袈裟な鉢巻姿で、

源右衛門は、思わず、にやりと笑った。

「臆おくしたか、大谷」

と、大声で一喝いっかつすると、木刀を放り投げ、傍かたわらの大刀を手にした。

助市は、さらに驚いて、

「木刀での試合の筈」

と言ったが、声が噎かれて、言葉が出ない。

その間に、源右衛門は、刀を鞘さやから抜き放った。

（切り殺すつもりだ）

助市は思った。

源右衛門は、抜き身の刀を提さげて迫って来た。

助市は、持っていた木刀を青眼せいがんに構えた、が、腰は後ろに引けて、へっぴり腰で、後ずさりした。

源右衛門は、間合いを詰めると、刀を大上段だいじょうだんに振り被かぶり、気合いもろとも、助市の頭上に振り下ろした。

が、助市が素早く後ろに引いたので、刀は助市の木刀の切きっ先さきあたりを、切り飛ばした。

源右衛門は、さらに前に出て、素早く刀を返して切り上げた。

助市の木刀が、はじかれて宙に飛んだ。

源右衛門は、攻めるのを止めや、助市を見た。

助市は、肩で荒い息をしている。

そして、助市は、腰に差していた脇差を抜いた。

助市の脇差しは、刃渡り一尺四寸の小脇差しである。こわきざし

源右衛門は、勝ったと思った。

助市と源右衛門は、しばらく睨み合った。

腰の引けていた助市が、少し伸びあがり、右手に構えていた脇差しが、わきざしだらりと下ろされた。

瞬間、源右衛門は、脱兎のごとく詰め寄り、上段から、一気に助市の頭上へ振り下ろした。だっと

だが、助市は、かろうじて脇差しの右峰で、源右衛門の斬撃ざんげきを受け止めた。助市の右腕に、強い衝撃が走った。

源右衛門の刀は、脇差しの峰から鰐つばに食い込んで、止まっただかに見えた。

しかし、源右衛門は、このまま押し込めると思った。

が、源右衛門の刀は、脇差しに吸い込まれるように左へ流れたのである。

それと同時に、源右衛門の右に体をかわした助市が、左手で、源右衛門の二の腕をつかみ、下に引いたので、源右衛門の顎あごは上がり、思わず、助市を振り返った。

その次の瞬間、ひるがえ翻された助市の脇差しの柄尻つかじりが、源右衛

門の顔面を打ったのである。

がつんと、鈍い音がして、源右衛門の目の前は真っ暗になり、源右衛門は、その場に倒れ伏した。

源右衛門は、少しの間、意識を失って倒れていた。気がつくと、鼻から生温かいものが流れ出ているのがわかった。

血だった。

どうやら、鼻の骨が折れたらしかった。

源右衛門は、起き上がって、地べたに座り込んだまま、辺りに目をやった。

助市が、源右衛門を見下ろしているのがわかった。

助市は、

「私の勝ちで、よろしいですな」

と、源右衛門に言った。

源右衛門は、頷くしかなかった。

もし、源右衛門を打ったのが、柄尻でなければ、源右衛門は死んでいた筈である。

助市が去った後、源右衛門は、地べたに座ったままつぶや

いた。

「やつの流儀りゅうぎは、小太刀こだちだったか…」

次の日から、源右衛門は、病氣と称して、勤めを半月ほど休んだ。

ようやく、怪我をした辺りの痛みも、やわらいだ様子であったので、久し振りに出仕しゅっしをした。

出仕をしたのはいいのだが、いきなり、中老の稲葉外記に呼びつけられたのだった。

稲葉は、源右衛門を見るなり顔をしかめた。

「なんだ、その面体めんていは」

と、厳しく言った。

源右衛門は、痛みこそ一時よりは、治まってきたものの、腫れはまだ治まっておらず、顔の真ん中ばんに、白い布を絆そっこう創膏で張り付けて、湿布しつぷをした状態だった。

お世辞にも、ほめられた姿ではなかった。

いや、これとは、源右衛門は、言い訳がましく弁解しようとした。

これより少し前、稲葉外記は、城中で、家老の桑折新左衛門こおりしんさえもんに声をかけられた。

桑折は、小声で、

「源右衛門は、いかがした？」

と言った。

稲葉は訝いぶかしく、

「は、なんでございましょう」

と、答えた。

「なんだ、しらんのか」

と、桑折は、侮あなどったように、唇を少し歪めて笑った。

「源右衛門を、呼び出して、その方が確かめてみよ」

そう言つて、去つて行つた。

稲葉は、何のことかさっぱりわからず、源右衛門を呼び出した。といった、はなしなのである。

呼び出してみても、稲葉は、源右衛門の様子を見、怒り心頭に達していた。

「黙らっしゃい、そのような成なりで出仕するなど、もつての外ほかである、しばらく休んでおれ」

と、稲葉は言い放った。

源右衛門は、返す言葉もなく辞去した。

稲葉は、おおよその理由は聞き知っていた。

しかしながら、それを、家老である桑折新左衛門から知らされたのは、我慢できなかった。

本来なら、桜田源右衛門は、中老である稲葉の支配下にはない。

それは、とりもなおさず、桜田一派の稲葉に対する、桑折の嫌味である。いやみ

稲葉は、いつまでも源右衛門に関わると、ロクなことがないような気がした。

源右衛門との試合の後、助市は、特に変わった様子もなく、日々の生活を送っていた。

事の成り行きを、助市から聞いた善兵衛は、少し表情が硬くなったものの、

「まあ、なんにしろよかった。これで、大内とのはなしも、進めなければならんな」

と、言っただった。

段々と、冬が近づいてきていた。

井戸の水も冷たくなり、朝、顔を洗うのもおつくうな気がして、助市は、大きく深呼吸をしてから、勢いをつけて桶の水をすくって、一気に顔を洗った。

顔を洗うと、このところ、首の後ろに痛みが走った。

顔をしかめて、濡れた手拭いで、首の後ろを冷やしていると、後からやって来た善兵衛が、めずらしく、

「どうした、えらく痛そうではないか、自分ではやりにくからう、どれ、儂が手伝ってやろう」

と、機嫌よく言った。

最近、懸念けねんされていたことが、解消されたせいかな、善兵衛は、すこぶる機嫌がいい。

善兵衛は、助市から手拭いを取り上げると、丹念に水に浸けて冷やした。そう丁寧にしなくても、充分に水は冷たいのだが。

善兵衛は、「どれ」と言っ、冷やした手拭いを、助市の首の後ろにあてた。

「少し、腫れておるな、どうした」

と、心配そうに言った。

「この前の試合の時に、私の木刀が当たったのです」

助市は、答えた。

「ほう」

と、善兵衛は言ったが、一呼吸おいて、

「それは」

と、訊きいた。

「桜田殿が、私の木刀を弾はじき飛ばしたものが、当たったのです」

助市が言った。

「なるほど、そうか」

善兵衛は言った。が、じつと、その傷跡を見ていた。

そして、もう一度

「そうか」と、少し大きな声で繰り返すように言うと、立ち上がって、急いで外へ出て行ってしまったのである。

与三郎は、廊下を、自分の名前を何度も呼びながら、血相を変えて部屋へ飛び込んできた善兵衛を見た。

「どうした、善兵衛」

与三郎は、強い語調で言った。

「与三郎、わかった」

「なにが、わかったのだ」

善兵衛は、興奮していた。

「稲妻落しがわかった」
いなずまおとし

「本当か」

与三郎は、目を見開いて善兵衛を見つめた。

善兵衛は、与三郎に語った。

善兵衛が、語った内容はこうだ。

その時、尾上一刀齋と金子瑞玄は、おおよそ四間程の間合
おのがみいつとうざい ずいげん よんけん
いで対峙した。
たいじ

お互いに、相手の様子を伺っていた。

と、瑞玄がやにわに、目にも止まらぬ早業で、腰に差して
はやわざ
いた脇差しを抜きはなつた。
わきざし

瑞玄は、抜き放つと同時に脇差しを放り投げたのだった。

一刀齋は、その動きに気を取られた。

その瞬間、瑞玄は、電光石火のごとく大刀を抜き、一刀齋
でんこうせっか

に迫った。

一刀斎は、しまったと、思った。

一刀斎は、慌あわてて刀を抜いた。

しかし、瑞玄は、大刀を右八相みぎはっそうに構え、俊敏しゅんびんにすぐそこまで迫ってきていた。

だが、さすがに一刀斎である。瞬時に瑞玄の太刀筋たちすじを読んだ。

一刀斎は、瑞玄の太刀に応じようとした。

しかし、その時、一刀斎の背中に鋭い痛みが走った。

一刀斎の動きが、一瞬止まった。

その隙すきを、瑞玄は逃さなかった。

右八相みぎはっそうから、大上段だいじょうだんに転じた瑞玄の刀が振り下ろされ、

一刀斎は、絶命したのである。

「先生は、動けなかったのだ」

善兵衛は、与三郎に言った。

「やはり、桜田が切ったのか」

与三郎は、興奮した。

「わからんか、与三郎」

善兵衛は言った。

「なにがだ」

「脇差しだ」

与三郎は、あつ、と言った。

金子瑞玄は、あらかじめ、脇差しわきざしを宙に投げ上げておいて、自らの攻撃に移ったのである。

迫り来る瑞玄に対し、一刀斎には、それを考える余裕はなかった。

投げ上げられた脇差しは、その場に居いついた一刀斎の背後を、確実に襲ったのである。

さりとて、その技を習得するには、血のにじむような修練しゅうれんと研鑽けんさんが必要であつたろう。

意図いとしたものかは分からないが、鍛え抜かれた動きは、美しいものである。一刀斎が、それに心を奪われたのは不思議ではなかった。

「稲妻落しは、あつたのか…」

与三郎は、言った。

春になり、桜もそろそろ咲き始めた、晴れた日。

助市とよりの婚礼が行われた。

よりは、花柄の華やかな打ち掛けで、助市の隣に座っていた。

与三郎夫婦が、末娘の晴れ舞台にと奮発したもので、善兵衛は、うちには不似合いだと文句を言ったが、まあ、それもよしということで落ち着いた。

祝いの席で、助市の叔父の大二郎が、高砂やを謡うたっている。時代は、幕末から明治に移ろうとしていた、万延元年の春のことである。

よりは、幸せであつた。